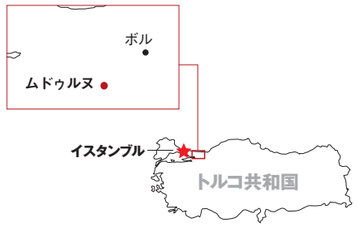
Slow Turkey
スローに旅するトルコ
Vol.15

町に息づく ギルドの精神

黒海沿岸地域の西部に位置するムドゥルヌ（Mudurnu）。
建築物にオスマン朝の歴史が垣間見えるチッタスローの町だ。
今、ユネスコ世界文化遺産に登録される可能性を秘めた注目の小都市でもある。



1 2～3階建ての伝統的木造家屋が建ち並ぶ　2 19世紀にフランス人建築家によって設計されたアルムトチュラル邸　3 出窓やバルコニーが特徴的なムドゥルヌハウス　4 町のシンボルともいえる時計台の高さは約12m　5 固有種も多く生息するアバント湖

ムドゥルヌは黒海地域のなかでも海に面していない内陸エリアに位置する。最寄りのゲートウェイ都市は南西52kmにあるボルで、首都アンカラまでは約200kmの距離だ。人々の営みの歴史が続く山間部のこの小さな町がチッタスローに認定されたのは2018年。それだけでも観光客の注目を集めるに足るが、世界遺産の暫定リストにノミネートされているというから、ますます目が離せない。選定の理由は歴史的なギルド都市でもあること。商工業者が結成した職業別の組合、ギルドにより、生産物の品質維持や組合員の共存共栄が図られ、当時の商業スタイルとして歴史的価値が認められた。

ムドゥルヌの歴史は古代までさかのぼる。ビザンチン帝国時代には丘の上に城塞が築かれ、アンカラからイスタンブルへ抜ける交易ルート上の町としても栄えた。その後、オスマン朝の町となり、典型的なオスマン朝の建築様式や民家がその名残を今にとどめている。

最も象徴的なのは、1382年に建てられたユルドゥルム・バヤジッド・モスクとハマムだろう。スルタン・ムラット1世の皇子のボル政務時代に建てられたもので、初期オスマン建築の好例として見ることができる。一時期閉鎖していたハマムは近年修復されており、現在営業しているというからぜひのぞいてみたい。

また、町の中には2～3階建ての伝統的木造家屋、ムドゥルヌハウスが残っている。外観で特徴的なのは、出窓やバルコニー、ドアなどに施されたオスマン建築の彫刻だ。木工美術のような美しさがあり、近くに寄って細部を見たくなる。

建築物では、19世紀にフランス人建築家によって設計されたアルムトチュラル邸も見どころの一つ。一般公開はされていないものの、建物全体のスタイルとバルコニーの装飾などを外から眺めることができる。

洗濯小屋を探して

旅行者が町歩きをするなら、東側の斜面に建つ時計台が目印になる。1890～91年に造られたものだが、木造のため、1900年に一度焼失した。

この町では洗濯小屋を探すのも面白い。地域が管理する洗濯小屋は、絨毯のような大きな物を洗う時に使う共同の小屋で、言われなければ素通りしてしまいそうな佇まいの木のドアを開けると、奥に湯を沸かすためのかまどや洗い場がある。洗濯をする以外にも、地域のコミュニティーの場としての役割を担っていたとされている。

旅行者におすすめなのは、活気あるバザールの見学だ。南北に延びるメインストリートの西側に広がるエリアで、メインストリートに平行する4本の通りと垂直に走る通りが格子状になっているのが特徴。商店の多くは2階建ての小規模店舗で、靴の修理をはじめ、金物、馬具、ナイフ、銅器、鉄器などの工房が並ぶ。後期オスマン帝国の技術を継承しており、こうした工房は今後保全される方向にあるという。

また、地元の農産物も売られており、毎週土曜にはメインストリートを挟んだ反対側に多くの露天が並ぶ土曜市も立つ。日にちを合わせて出かけるのがいいだろう。

少し足を延ばすなら、ムドゥルヌから約23kmのアバント湖がおすすめだ。アバント山脈の北東にある湖で、周辺には松やブナ、楢などの木々、シャクナゲやサンザシ、ローズヒップ、シダ、ブラックベリー、つくしなど多くの植物を見ることができる。キツネやシカ、リスなどの野生動物、鷲や鷹、フクロウ、キツツキ、ナイチンゲールなどの野鳥、さらにアオサギやツル、アヒル、ガチョウなどの水鳥も生息しており、睡蓮の咲く湖には魚も多く見られる。

この湖で発見された固有種、アバント・トラウトは特定の時期に有料で釣ることができるため、フィッシング愛好家の間で注目されているという。1988年には約1150ヘクタールが自然保護区になり、湖周辺ではハイキングやピクニックを楽しみたい。

Mudurnu
ムドゥルヌ

チッタスロー（cittaslow）
「スローシティ」の意。地域独自の生活・歴史文化や自然環境など多様性を重視した町づくり活動。

トルコの伝統手芸、オヤ

トルコの女性は髪をスカーフで覆うが、そのスカーフの縁飾りがオヤだ。トルコ西部、特にアナトリア地方で盛んに作られ、ムドゥルヌでも古くから女性たちの手仕事によって美しいオヤが生み出されてきた。

スカーフの四辺を飾るオヤはさまざまなものをモチーフにしている。バラやカーネーションなどの花、蝶などの昆虫、いちごやとうもろこしなどの食物、そして男性のひげや兵隊といったものまで。身に着けたオヤスカーフの色で喜びや悲しみなどの感情を表すこともあるという。

ムドゥルヌでは花嫁が身に着けるオヤスカーフは特別といえる。バラの枝につぼみや花を大きくあしらい、冠のように華やかに飾るのが伝統的だ。多くの町で手工芸が衰退するなか、もともと銅細工や木彫り、裁縫などの手工芸が栄えていたムドゥルヌでは、今もオヤの文化が脈々と受け継がれている。